

写真なの？絵画なの？

2月14日、区役所2階の区民ギャラリーでは、水野宏写真展が開催されています。看板には、はっきりと写真展とありますが、カメラの内蔵機能を使って、水彩画やデッサンのような絵画タッチの作品に仕上がっているため、来場者は「これは写真なの？」「絵画なの？」と悩んでいました。

水野宏さんは、1931年生まれの85歳です。区内で、70歳まで鉄道模型機関車の製造を行ってきました。仕事をやめてからは、趣味の木工や日本画を楽しんできました。その趣味の絵を描く時には、題材を探し区内や都内を訪れ、デジタルカメラで撮影をしたものを見ながら自宅で作品づくりを行ってきました。しかし、80歳になった頃、カメラ教室に通ったことで、デジタル一眼レフカメラに内蔵された機能を利用することで、絵画のような作品が作れることを知りました。

デジタル一眼レフカメラによる絵画のような作品づくりは、最初に基になる写真を撮影し、そのデータに強調したい色補正をしたりトリミングすることで、新たな作品が出来上がります。その作品に、さらに違う色補正を加えることを繰り返し、最初の写真とはまったく異なった色合いやタッチの作品となります。さまざまな色補正を組み合わせることで、「本来の写真」から「絵画のような写真」が完成します。

水野さんは、絵画を描くために撮影していた写真のほとんどが、いつのまにか絵画のような写真をとることの面白さにのめり込んでしまったそうです。

今回の写真展には、区内の善福寺公園の睡蓮を撮影し、デジタル加工した作品は、あのモネの睡蓮を連想させる素晴らしい色合いになっています。そのほかにも、都心のビル群や東京駅などが、形はそのままだにオリジナルの色彩とタッチに変化していました。会場で案内をしていた水野さんは、「来場者からは『写真なの？』『絵画なの？』といった質問が一番多いです。」と話していました。この作品展は17日までで、入場は無料です。



【問い合わせ先】

総務部広報課：03-3312-2111（内線）1502